

Н. А. Мещерский ; История иудейской войны Иосифа Флавия  
в древнерусском переводе, АН СССР, М.-Л., 1958. 576 стр.

Н. А. Мещерский

「古代ロシア語訳におけるヨセフス・フラウィウスのユダヤ戦史」

中村喜和

I

ロシアおよびソヴェトの学問的伝統において、通常、古代ロシア文学と呼ばれる時期（11～17世紀）の文学作品については、若干の普及版あるいは教科書は別として、いままで「文学の記念碑」シリーズ *Литературные памятники* のなかで、ごく限られたものについてのみ、テキスト・クリティーク、注釈などの基礎的研究が発表されてきた。これは科学アカデミヤのなかの文学・言語部会によって発行されているものであり、世界各国の古典的作品を含むシリーズであるが、最近になっておなじアカデミヤに所属するロシア文学研究所（プーシキン記念館）の古代ロシア文学部が、特に古代ロシアの文学作品にかぎってモノグラフを出版していくむねを明らかにした。<sup>1)</sup> キーエフ時代（11～13世紀）ではつぎの諸作品が新しいシリーズに含まれる；イラリオンとキリールの著作、ボリスとグレープの聖者伝、修道院長ダニールの巡礼記、キーエフ・ペチョラ教父伝、ユダヤ戦史、ヂェヴゲーニの事蹟、囚人ダニールの祈願、ルーシの地の滅亡の物語、アレクサンドル・ネフスキー一代記。

この時期の文学を研究するものにとって、信頼できるテキストを手に入れることが困難であったおりに、この企ては大きな喜びであり、同時にソヴェト学界の最新の研究の成果がうかがえるので興味ぶかい。このシリーズは1955年から10年のあいだに完

結するといわれるが、1958年にあらわれたメシチェルスキの労作「古代ロシア語訳におけるヨセフス・フラウィウスのユダヤ戦史」は筆者が手に入れることのできた最初のものである。

さて、「芸術的、思想的にすぐれた作品および文学史的に大きな意義をもつ作品」<sup>2)</sup> にさざげられるこのシリーズに、「ヂェヴゲーニの事蹟」とならんで、翻訳文学である「ユダヤ戦史」が含まれているのは何を意味するのであろうか。

ここで「ユダヤ戦史」と呼ばれているのは、いうまでもなく、ユダヤ人ヨセフス（37～95?）の最初の著作であり、「ユダヤの戦いについて」 *Περί τοῦ Ἰουδαϊκοῦ πολέμου* あるいは「ローマ人にたいするユダヤの戦いの歴史」 *Ἱστορία Ἰουδαϊκοῦ πολέμου πρὸς Ῥωμαίους* その他の呼び名で知られる歴史記述である。全体は7巻からなり、アンチオコス・エピファーンネス（c. 170 B. C.）の時代からはじまるが中心はローマ帝国の支配にたいするユダヤ人の叛乱（66～70 A. D.）の記録である。

ロシアにはすでにキーエフ・ルーシの時代からこの作品の翻訳が存在した。この最初の翻訳がおこなわれた時期・場所については、のちに述べるようにならずしも諸説が一致していないが、近代になってこの作品が文学史家の注目を集め、研究がさかんになったのにはふたつの理由があるように思われる。

まず第1には、ロシア版「ユダヤ戦史」には現在つたわっているギリシャ語の諸写本にみられぬ部分

が少なからず含まれていることである。そのなかには明瞭に新旧の聖書、マララスやゲオルギオス・ハマルトスなどの年代記からの引用もみとめられるが、翻訳のさいに用いられた原本に由来するものかそれとも翻訳者自身の発意によるつけ加えか明らかでないものがかなり多い。しかもそこにはヨセフスの同国人であり彼とほんのすこししか時代的にずれていないナザレのイエスに関する記事も含まれているのである。ベレンツ A. Berendts, アイスラー R. Eisler らの研究はおもにこの問題を追究している。<sup>3)</sup>

第 2 にはキーエフ時代以後のロシアの文学、特に軍記物語 *воинские повести* と総称される作品がこの翻訳作品と文体の面でいちじるしい共通性をもっていることである。なかでも「イーゴリ遠征物語」との関係は古くから多くの研究者によって指摘されてきた。<sup>4)</sup> とりわけ問題となるのは戦闘の描写である。たとえば「イーゴリ遠征物語」の「雨は矢となってふりそそぎ」(итти дождю стрѣлами, *Ed. Princeps*, 12, 8~9) と「ユダヤ戦史」の「矢は雨のごとくふった」(古代ロシア訳 стрѣли идяху, акы дождь, III, VII, 115<sup>5)</sup>) の類似などはもっともよく引かれる例であるが、戦場でたおれた兵士を束束(снопы)にたとえる方法が双方にみられることなども早くから注目されてきた。ロシア・ソヴェトの研究者たちの関心は主としてこの面に向けられている。<sup>6)</sup>

「ユダヤ戦史」は、それ自体としてすぐれた歴史記述であり、文学作品である。ギリシャ版にはホメロス、ツキエディデース、ヘロドトス、ソフォクレスなどの文体が意識的に模倣されているといわれる。<sup>7)</sup> しかしいろいろの点でギリシャ版とはかなりちがっているこの作品の古代ロシア訳が新しいシリーズで刊行されたのは、古代ロシア文学のなかでそれがなっている文学史的意義の大ききのゆえであるように思われる。

1) *Труды отдела древнерусской литературы*

ры (以下 *ТОДРЛ*) X, 1955, стр. 491~499.

2) *ibid.* 429.

3) Berendts には *Flavius Josephus vom Jüdischen Kriege, Buch I—IV, Nach der slavischen Übersetzung*……Dorpat, 1924. そのほか, Eisler には *Die slavische Übersetzung des 'Αλωσις τῆς Ἱερουσαλήμ* des Flavius Josephus, *Byzantinoslavica*, v, II, Praha, 1930. そのほかがあるがいずれも筆者未見。ここでは Мещерский, Гудзий, Thackeray らによって彼らの見解を知った。

4) そのもっとも有名な例はバルソフ E. Барсов である。彼はその「イーゴリ遠征物語」研究の主著である 3 巻本の第 1 巻 (M. 1887) の第 1 章で、古代ロシアの翻訳作品と「イーゴリ遠征物語」の比較研究の重要性を強調し、まず最初に「ユダヤ戦史」をあげている (Ф. М. Головенченко, *Слово о полку Игореве, Историко-литературный и библиографический очерк*, M. 1955, стр. 211)。しかし文学史一般におけるその評価は高くなく、スペランスキイ M. Н. Сперанский はその文学史のなかで単に「ユダヤ戦史」の名をあげているだけであり (*История древней русской литературы*, M. 1920<sup>8)</sup>, стр. 257)。ブイピンにいたってはこれを全く無視している (*История русской литературы*, т. 1. С.-Петербург, 1911<sup>4)</sup>)。ただしオルロフはややことなる (次章注 3 参照)。

5) Мещерский, 86. ただし本文 (301) にはなく, Loeb 版の同所にもみあたらない。メシチェルスキイの誤りであろう。

6) このさい「ユダヤ戦史」の用語法、文体が古代ロシア文学、特に軍記物語にあたえた影響と同時に、古代ロシア文学の伝統がこの作品のロシア訳におよぼした影響が考えられる。それゆえバルソフは「イーゴリ遠征物語」と「ユダヤ

戦史」古代ロシア訳の類似点を60以上もあげているが、これはメシチェルスキも述べるごとく、すべてが後者から前者への影響とみるのは不自然である(104)、しかしこの問題はこの紹介の範囲外であるので、いまは、両者が共通の土壌でつちかわれた作品であって、キーエフ文学全体のなかで考慮されなければならないということを目指すにとどめておく。

- 7) H. St. J. Thackeray, *Josephus*, II, London, 1954, xvi. おなじことをメシチェルスキも指摘している(37).

## II

一般にキーエフ時代の文学において、南スラヴや西スラヴを経てつたえられたり、あるいはキーエフで訳されたりしたビザンチウムの文学がいかなる役割を果たしたかという問題は、非常に大きな困難を含んでいる。まず第一に、われわれはキーエフ・ルーシの文学の全貌を知ることができない。13世紀の中頃キーエフその他の土地は蒙古族の徹底的な劫掠を受けたし、また中世の長い期間を通じて教会と結んだ支配者たちが世俗的な文学にたいして敵対的な態度をとっていたためである。「イーゴリ遠征物語」さえたった一本の写本でしかつたわらなかつたことはその雄弁な例証である。このことから、チホヌラーヴォフ Н. С. Тихонравов やニコリスキイ Н. К. Никольский のように、ただちに古代ロシア文学史の成立不能を断ずる<sup>1)</sup>ことはやや早計であるとしても、現状から得られる結論は仮説的なものであることはまぬがれぬであろう。

つぎに、キーエフ・ルーシは10世紀の世にキリスト教を受け入れるまで文字に定着された文学をもたなかったために、通時的な比較が不可能なことである。もちろんリハチョフの強調するように、東スラヴ族がキリスト教を摂取する以前に何ら文学的遺産——すなわち文字さえあれば、うたがいがもなくただ

ちに文学として成立しうる芸術形式——をもたなかったと断定することは当を得ていない。<sup>2)</sup>しかしわれわれはこんにち、ごく間接的にしかこの遺産をうかがうことができないのである。

最後に、このような一般的な問題を論ずるためには、なお個々の作品についての研究が不充分であるということがいえよう。

「ユダヤ戦史」の古代ロシア訳を考えるさいにもその翻訳がどのような文化的環境のなかでおこなわれたか——すなわち翻訳者が原文をどの程度理解でき、彼およびロシア文化の側にそれを表現する能力がどれほどありえたか、ということはいまなおごくわずかしから知られていないのであるから、われわれとしては逆に、この翻訳をも主要な手掛りとしてそれを推察していくほかはない。したがって当然そこから引き出される結論はかなりの振幅をもたざるをえない。このような事情のなかで、さまざまな結論だけをいたずらに比較することはほとんど意味がないであろう。問題は結論にいたる過程の論理の妥当性にあるのだから、それゆえ今世紀の30年代においてさえ、オルロフ А. С. Орлов のような文学史家がつぎのように述べ、以下に紹介するメシチェルスキにするどく対立しているにしてもおどろくにあたらないのである。《一般にヨセフスの議論、一連の諸事件の説明、彼の体験は封建ルーシの文化的水準から全くかけはなれていたもので、この時代のロシアの諸作品において、それが利用されることは期待できない。「ユダヤ戦史」からロシアの作家たちが借用したものはといえば、それは戦闘の描写の若干の要素と、部分的な筋の運びにすぎない。》<sup>3)</sup>

1) Сперанский, *op. cit.*, 序文。

2) Лихачев, Д. С.; *Вопросы истории*, 1951, III стр. 30~54. Исторические предпосылки возникновения русской письменности и русской литературы.

3) Орлов, *Переводные повести феодальной*

*Руси московского государства XIII~XVII веков*, Л., 1934, стр. 9. なおこれ以後キーエフ時代の翻訳文学の研究はとだえている (Мещерский, *ТОДРЛ* XV, 54).

Ⅲ

メシチェルスキイは現在ペトロザヴオトクスの教育大学教授であり、1930年の「アカデミヤ報告集」*Доклады АН СССР, серия 13, No. 2* に「ユダヤ戦史」の古代ロシア訳についての論文を発表して以来かなり長いあいだこの作品と取組んでいる。50年代になってからは「ユダヤ戦史」を含めたキーエフ・ルーシの翻訳文学に関する彼の論文が多くの論文集にあらわれている。そしてこんどの著書はその質および量からいって、おそらく、彼の研究のいわば総決算であると考えられる。内容は古文書学および文学史的概観、テキスト、注釈、索引に分かれている。ここでは主として、最初の概観を中心としてこの書物を紹介し、若干の感想を述べてみたい。

「ユダヤ戦史」の古代ロシア訳は、メシチェルスキイの調査によれば、15世紀から18世紀までの30の写本でつたわっている。これらはいわゆる「ユダヤ編年誌」<sup>1)</sup>の一部としてそのなかに収められているものと、独立した写本でつたわるものふたつに分けることができる (メシチェルスキイは前者を編年誌版、後者を単独版と名づけている<sup>2)</sup>—30頁)。ペレンツヤアイスラーは単独版をより古い形と考えたが、この著者は両者が同一のテキストにさかのぼると考え、古形をより完全に示しているという編年誌版を底本として用いている。なお、はじめてこのテキストをフランスで刊行したイストリン В. Истрин は両者の相違に注意をはらわず、単独版を使用している。<sup>3)</sup>

さて「ユダヤ戦史」の古代ロシア訳はいつ成立したのであろうか。アイスラーはこの作品の翻訳がのちのユダヤ派異端 *жидовствующие* と関係のある

事業とみて、13世紀リトワでおこなわれたと説いているが、これは現在ほとんどみとめられていない。メシチェルスキイはこの翻訳がラテン教会にたいして批判的でないこと (東西両教会の大分裂は1054年)、ポーロヴェツ族の名があらわれぬこと (原初年代記は1054年にはじめて言及) などから、おそらく、年代記の1037年の項に述べられているヤロスラフ侯の翻訳事業のなかに含まれていたのではないかと推論している。しかしこの根拠は薄弱すぎるように思われる (explanatio ex silentio!)。グーディもこの可能性をみとめてはいるが<sup>4)</sup>、メシチェルスキイのように断定的ではない。この翻訳の背景として当時のルーシ社会の反ハザールの気運が考えられるという説はグーディによって否定されている。<sup>5)</sup> ただし「イーゴリ遠征物語」、「ガリーチ・ヴォルニニ年代年記」との関係からみて、12世紀を下らぬことはたしかである。「イーゴリ遠征物語」のなかで歌われているボヤーンと「ユダヤ戦史」の訳者が同時代人ではなかったかというメシチェルスキイの示唆は、その根拠がきわめてよわいものであるにしても、一往の興味をひく。

「ユダヤ戦史」の研究において最大の論点のひとつは古代ロシア訳の原本が何かという問題である。ヨセフスは最初、母国語たるアラム語でこの作品を書き、のちローマ帝国内で広く読まれるように、ギリシャ人の助手の助けを得てギリシャ訳をおこなったことが知られている。このギリシャ訳はただちにチトゥス帝にささげられたが、新しい写本ができるたびにヨセフスは補筆と改訂をおこなったものと考えられる。5世紀にはラテン訳、5あるいは6世紀にはシリヤ訳、10世紀にはユダヤ訳があらわれた、ところで現在西欧で知られているギリシャ語写本はすべて10世紀以後のものであるが、それらがいずれも古代ロシア訳とくらべていちじるしくことになっていることからさまざまな臆測や論議がはじまった。

ギリシャ語本とロシア訳のくいちがいをはじめて

指摘したのはポポフ A. Попов であるが、ベレンツは古代ロシア訳のみにみられるイエスや洗礼者ヨハネに関する記事がヨセフス自身の筆になることを強く主張して、神学者や原始キリスト教研究者に衝撃をあたえた。彼の推測によれば、最初のアラム語版およびそれから直接おこなわれたギリシャ訳にはイエスに関する記述が含まれていたものであり、現存するギリシャ版でそれが脱落しているのは、ヨセフス自身がユダヤ人の民族感情をはばかってそれをのちのギリシャ版からけずったためであるという。アイスラーもベレンツのおこなった古代ロシア訳のドイツ訳をもとにして、ほぼ同一の結論を出した。彼は71年にアラム語からギリシャ訳がおこなわれ、75年以後にローマ人のためにふたたび改訂訳が出されたとし、古代ロシア訳は前者にもとづく想定した。彼の意見ではこの訳は全くの逐語訳であり、これをもとにしてギリシャ本再建の可能性があるという。<sup>6)</sup>ギリシャ本がひどくことなるふたつの版をもっていたという説はイストリンも採用している。

これにたいしてメシチェルススキの意見はつぎの通りである。「ユダヤ戦史」の古代ロシア訳はアラム本を底本としていない。ベレンツの指摘しているアラム語風は実際にはみとめられないし、翻訳されずにのこっているギリシャ語の単語（*ἀδοξίστε* адоксите, II, X VI, 47）その他、構文上のギリシャ語法が多くみられることから原本はギリシャ訳と考えるべきである。著者はさらに、アラム語本は最初から存在しなかったという大胆な推測をしている。ギリシャ本のまゝにアラム本があったというヨセフスの証言は文学的な *mystification* ではないかと彼は疑っているのである（68～69ページ）。原本をギリシャ本としてもメシチェルススキはアイスラーとちがひ、古代ロシア本がそこから逐語的に訳されたようなギリシャ本は存在しなかったと考える。たしかにグーディも指摘するように<sup>8)</sup>ベレンツ、アイスラーが現存もしなければかつてその存在が証明されたこ

ともないようなギリシャ本が古代ロシアの翻訳者の手にいかにしてつたわったかということが説明できないかぎり、メシチェルススキの意見はきわめて説得的である。しかしメシチェルススキの説明のなかに全く問題がないわけではない。彼は古代ロシア訳が「一般に受け入れられているギリシャ語テキスト」*общепринятый греческий текст* にさかのぼると説くが（58, 73, 75, 98ページ）、その概念は明瞭さを欠いている。一方においてそれはニーゼ Niese 校訂本<sup>9)</sup>を指すと説明されながら（37ページ）、他方において古代ロシア訳の意義はニーゼ本を含めて西歐につたわる諸本と系統を異にするところにあるとし（47ページ）両者を関係づけることはできないと強調しているのである（471ページ）、（彼はまた別に「基本的なギリシャ語テキスト」*основной греческий текст* という術語を用いている——73ページ）しかも彼自身のいうように古代ロシア訳の底本がニーゼ・グループのいかなる写本ともことなるとすれば<sup>10)</sup>、彼はなぜ8, 9章において、何らのことわりもなくギリシャ語テキスト（これは当然ニーゼ版である。彼はそれを「ギリシャ語の原本」*греческий подлинник* とさえ呼んでいる——76ページ）と古代ロシア訳を対置し、比較できるのであろうか。

ところでベレンツやアイスラーの説を否定する以上、当然、補足を含めて古代ロシア訳の特殊性がロシア人の翻訳者の発意に帰せられることになるが、これについてのメシチェルススキの意見を検討するまゝに、伝来ギリシャ写本と古代ロシア本の主要な相違点をあげてみよう（以下 Loeb 版を参照）。

まず古代ロシア訳には1巻から7巻までの全部にわたっておびただしい脱落や省略がある。第1巻では有名な序文が完全にぬけている。<sup>11)</sup>以下省略はほとんどすべての章、節にまでおよび、結局、かなりの数にのぼる補足にもかかわらず全体の分量は古代ロシア訳のほうが少くなっている。ベレンツはこれを訳者の疲労によるものと説明した。これにたいし

てメシチェルスキは翻訳の題が「エルサレムの陥落について」О полонении Иерусалима であることから推察されるように、訳者の関心はおもにエルサレムの運命にむけられていたのであって、この主要なテーマと関係のないものは極力とりのぞかれたのであると述べている(50ページ)。ローマ軍によるエルサレム占領に関する5, 6巻が他の巻とくらべてどの程度省略が少いかについて具体的な説明が必要と思われるが、著書の説はさきに述べたオルロフの見解と部分的に一致しており、古代ロシア文学の特質の一斑を暗示している。

さてつぎには補足の問題がある。「ユダヤ戦史」の古代ロシア訳のなかには新旧の聖書やマララス、ゲオルギオス・ハマルトロスの編年誌からの引用も同時に混入しており、どこを純粹に補足とみとめるかとなると技術的にむずかしい点があいくつもあるがメシチェルスキはごく主要なものとして41箇所をあげている。<sup>12)</sup>補足の量および内容はきわめて多種多様であって、その一般的傾向をとらえることは容易ではない(メシチェルスキは補足部分の性格の分析にはほとんど注意をはらっていない)。たとえばヘーローデースがローマにおいてユダヤ王に任ぜられる儀式に関する補足(Ⅰ, XⅣ, 4)は10語ほどで、説明がややくわしくなっているにすぎないが、これにたいしてユダヤのふたりの学者がヘーローデースにたいする反乱を教唆した事件に関する記事(Ⅱ, XXⅩⅡ, 2)はメシチェルスキの校訂テキストで20行におよんでいる。ごく概括的にいって旧約からの引用の部分、個人的意見を加えて教訓的調子をおびた部分、ローマの諸制度に関する批判、キリスト伝説その他に分けることができるであろう。このうちもっとも興味をひくキリスト伝説の補足はつぎの通りである。(1) 不思議な星の出現とペルシャの魔術師のヘーローデース訪問(Ⅰ, XXの末尾)、(2) 洗礼者ヨハネについて(Ⅱ, VII, 2~3)、(3) ヘーローデースにたいするヨハネの非難(Ⅱ, IX, 1)、(4) イエス

について(Ⅱ, IX, 3)、(5) イエスの弟子たちについて(Ⅱ, XIの末尾)。

メシチェルスキはこれらの補足についてつぎのように述べている、「…われわれの考えるところでは、それらはほとんど例外なくまさに古代ロシアの翻訳者によってなされたものであり、訳者の非凡な文学的才能と技量を証言している」(65ページ)、メシチェルスキにしたがえば古代スラヴおよびロシアにおける宗教書の翻訳の場合とことなり、訳者はこの作品をほとんど「作り直し」пересоздавать しており、古代ロシアの読者に一層興味あるものにしていく。これは当時のルーシが高い文化的水準にあったこと、発達した文章語を所有していたことを示している(76ページ)、彼はこの作品の翻訳が当時としてはまれな自由訳である証拠として、語順がギリシャ本とちがうこと、抽象的概念が具体化されていること、戦闘の描写が年代記などと共通点を含んでいること、構文の変化、比喩の頻用、頭韻、リズムへの配慮などをあげている。1世紀のユダヤ人ヨセフスの著作が古代ロシアの翻訳のなかでどのようにかかっているかということはこの時代の文学史を研究するものにとってもっとも興味ある問題であるが、メシチェルスキによるこの部分の検討は非常にくわしい。著者の長い期間にわたる研究の成果とみることができであろう。しかし以上の彼の論述から《古代ロシア版の「ヨセフス」を翻訳文学と考えるのは形式的であり、ロシアの作家の作品とみなすことができる》(65ページ)、と断定することがどの程度妥当であろうか。元来この種の問題に関する判断はごく微妙なものであり、数字をもって量的にいいあわすことができない以上、どのような判定も絶対的にあやまりであるということはむずかしいと思われるが、メシチェルスキの断定は極端にすぎる感じがする(一般に翻訳文学なるものは存在しないという立場にたてば話は別である)。しかしいま私はこれについて著者の説を反駁しようとは思わない。問題はこ

の先にある。逐語訳か自由訳か（あるいは翻訳か改作か）に関する彼の結論の妥当性とは別に、補足部分をすべて古代ロシアの翻訳者に帰する決定的理由はこの著書のなかに全く見出すことはできないのである。たとえば訳者はなぜヘローデースが内戦の途中とどまった村の名がアヴロン авронであったことを補足せねばならなかったのか（I, XVII, 7）またヘローデースの埋葬についてなぜ原本よりくわしい説明を必要と考えたのか（I, XXXIII, 9）、ローマの将校ウアレリアヌスの失敗の原因を挿入したのはいかなる理由にもとづくのか（III, IX, 7）……。ビザンチウムからキーエフ・ルーシにつたわった文学が何らかの意味で宗教性をおびていたということは一般的にみとめられている。<sup>13)</sup> このような環境のなかで、もし「ユダヤ戦史」の訳者が現在われわれがニーゼ版で知るような非キリスト教的色彩のつよい作品を翻訳したとすれば、そこにはかなりの理由があったはずである。しかも補足の大部分（件数からいって $\frac{7}{8}$ 以上）は何らキリスト教と関係のないものである。補足のうちの若干のものを古代ロシアの訳者の発意によるものと解釈することはかならずしも無理ではないにしても（たとえば旧約からタビデとソロモンの故事を引用している部分——II, I, 2, ヨセフスが死をまねがれたことに関する考察——III, VII, 7 など）、すべての補足を訳者に帰するメシチェルスキの結論には独断のきらいがある。<sup>14)</sup>

また彼がこの翻訳から知りうるとするキーエフ・ルーシの「高い文化水準」なるものもきわめて含意の多いことばとして受けとるべきである。たしかに「他のものを撰取することほど独創的または自己的なことはない」（ヴァレリー）のであって、「ユダヤ戦史」の翻訳における訳者の自由な態度は彼の創造的な力量をうかがわせるに充分であるが、それは文化水準の「高さ」とか「低さ」にただちにむすびつかないであらう。

5世紀にユダヤ人ヘゲシポスによってラテン語に

訳されたものをもとにし、タルムッドなどからも若干の物語をとり入れたユダヤ版の「ユダヤ戦史」はアラブ人やスラヴ人のあいだで広く読まれたが、メシチェルスキは「ヨシポン」と呼ばれるこの書物のロシア訳がすでにキーエフ・ルーシに存在したと主張している。彼はこの説の根拠として、アレクサンドロス大王に関する原初年代記の記事にみられる諸特徴をあげているが、グーディは書評のなかでこの理由を薄弱としてメシチェルスキの説をしりぞけている。<sup>15)</sup> このほかグーディは数箇所でもシチェルスキのテキスト校訂上のあやまりを指摘している。しかしソヴェト国内で「ユダヤ戦史」のテキストが刊行されるのはこれがはじめてであること、他のいかなる写本をも参照することができなかったため、筆者は彼のテキスト校訂について何も述べることはできない。

メシチェルスキのこの著書に関しては、以上述べたように結論に若干の疑問があるとはいえ、その研究は精密でよく整理されている。いままでイストリン、グーディをのぞいてはほとんどの文学史家によってまともには取り上げられず、パルソフ以下の「イーゴリ遠征物語」研究者やベレンツなどの外国の学者からしか注目されなかった「ユダヤ戦史」の古代ロシア訳も、こんどのテキスト刊行によってようやく古代ロシア文学研究のなかで正当な評価をあたえられる可能性を得たわけである。

1) 旧約聖書、諸編年誌、アレクサンドリヤ、ユダヤ戦史などを編集して、おもにエルサレムの陥落（70年）までのユダヤ民族の歴史を物語ったもので13世紀の後半リトワ領内のロシア人のあいだでつくられたといわれる（Orlov, *op. cit.* 11）。アイスラーはこの編年誌の成立と「ユダヤ戦史」の翻訳をおなじものと考えているわけである。

2) この編年誌版にはヴィリニウスにある Вилениский 写本と古文書文庫の архивский 写本

- が含まれている。しかしメシチェルスキは32, 35, 133 ページで 編年誌版と文庫写本を混同して用いている (15, 16 ページでは区別している)。なお第 3 章は、彼が底本として用いた Виленский 写本の説明であるが、これは最彼の数節をのぞき、ТОДРЛ, X, 380~386 の彼の論文と全くおなじものである。
- 3) Истрин, *La Prise de Jérusalem de Josef le Juif*, Paris, vol. I ~ II, 1934~38 (P. Pascal の仏訳を含む) これはテキスト (I ~ II), 研究 (II) 辞書 (IV) の順でパリのスラヴ研究所から出版を計画されていたものの第 1 部。以下は戦争のため中絶された。しかしその草稿は現在ソヴェトにあって、メシチェルスキにも利用された。
- 4) Гудзий, *История древней русской литературы*. М. 1956<sup>a</sup>, стр. 144.
- 5) Его же. Новейшие издание и исследование выдающегося переводного памятника древней Руси, *Известия отделения литературы и языка (ИЮЛЯ)* 1958, вып. 6, стр. 565.
- 6) Thackeray, *op. cit.* x~xi.
- 7) Мещерский, 276, Thackeray, 462. ただしこの章は後者では 5 節までであるが、前者は 3 節にしか区切っていない。これは多分メシチェルスキのあやまりであろう。
- 8) Гудзий, *История*, 145.
- 9) Niese, B. *Flavii Josephi Opera... Volumen iv. De bello Judaico...* Berlin, 1894. Thackeray もこれを底本としている (*op. cit.* xvii). ただし、1738年(あるいは1736年)には W. Whiston の英訳があらわれ、19世紀に少くとも 2 度版を重ねている (このうちひとつは一橋大学所蔵)。この英訳がいかなる版にもとづくかは不明である。
- 10) スラヴ訳のみが存在してギリシャ語の原本が つたわらぬことはかならずしも珍らしいことではない。たとえば Digenis Akritas (H. Gregoire によると、この作品の古代ロシア訳たる「ヂェヴゲーニイの事蹟」は現存するすべてのギリシャ版より完全に古形を保存している。Le Digenis russe, *Russian Epic Studies*, Philadelphia, 1949, p. 138.) 「エノクの神秘の書」(F. Dvornik, *The Slavs, Their Early History and Civilization*, Boston, 1956 p. 180.) など。
- 11) メシチェルスキは §§1—31 を脱落としているが (47), これは §§1—30 のあやまり (Thackeray, 2—16)。
- 12) このうち、I, III の冒頭にヒュルカノスの予言的能力についての記事が挿入されているというのは (51 ページ) メシチェルスキのあやまりで、Thackeray 34 からわかるように、これは 2 章の最後の節に収められている。区切り方にちがいがあただけである。しかしヘーローデースとメシアとの関係についての僧侶たちの会話 (I, XIX) が補足のなかにかぞえられていないので、総計にはかわりがないことになる。
- 13) たとえば Орлов, *op. cit.* 5; Гудзий, *История* 22; D. Tschizewskij, *Geschichte der altrussischen Literatur im 11., 12., und 13 Jahrhundert*, Frankfurt am Main, 1948, S. 71 その他。
- 14) この点はゲーディも指摘している (ИЮЛЯ, 564)。「文学史」における彼のひかえ目な見解のほうがより魅力的である。「ロシアの翻訳者の手もとにあったギリシャ語のテキストを正確に知りえないので、訳者のイニシアチヴの度合を正確に定めることはできない」(*История*, 146)。なお Stender-Petersen はアラム語とギリシャ語本を同一の版と主張し、イエスに関する部分を古代ロシア訳者に帰している (*Geschi-*

*chte der russischen Literatur*, B. 1, München, 1957, S. 92).

- 15) これに関しては *ТОДРЛ*, X III, 1957, 57～65 にメシチェルスキイの論文, К вопросу об источниках Повести временных лет がある。彼はここでイパーチ写本 6618 (1110) 年のくだりにみられるアレクサンドロスの見聞の記事はユダヤ語から直接訳された「ヨシボン」の存在を証明していると主張している(60ページ)。

グーザイの駁論は *ИЮЛЯ*, 567 参照。

- 16) *ibid.* 568 なおグーザイはメシチェルスキイの文献学的注釈がすぐれていると述べている。最後のグーザイの書評についていえば、メシチェルスキイのいくつかの大胆な結論に批判的であり、文学史における立場と全くかわっていない。しかし中心的な問題である補足については具体的な引例をもって論じておらず、彼の批判は表面的の観がある。(1959. 9. 30)